

# 「生涯現役」

吉本 隆明著



その著書において常に時代に刺激を与えり  
ードしてきた「思想家」が現実には「古い」を  
迎えたとき、どのように向き合い、どんな言  
葉を発するのか。そんな素朴で切実な問いに  
応えてくれるのがこの一冊だ。

まず初めに著者は断言する。老いは自然に  
やっつてなどこず、階段を踏み外すように突然  
に訪れると。自然に年をとるには、自分なりの  
努力が必要なのだ、と。その他、ますます  
つまらないと思ったことはやらなくなったこ  
とや、「日本語をローマ字にして使うからワ  
ープロは嫌だ」「老人は死と生の間にいて死  
と生の両方を見ている」等々、何となく想像  
できて、なぜかこの人が発言すると鮮明な  
イメージとして伝わってくるから不思議だ。  
ただ、そんな彼も、ここ数年の日本社会の  
急激な変化は予想外だったようで、欧米型資  
本主義社会への雪崩を打った移行を例に挙  
げ、生活への影響を指摘する。出版業界の不

## 「古い」テーマに時代批評も

▲ 洋泉社・810円

況はもとより、隠居後、楽しみにしていた個  
人的興味のある仕事もやる余裕がないとこぼ  
し、「古い」をテーマにしつつ、日常と連結  
した時代批評にもなっている。

それは意外な発言にも現れる。例えば、首  
相の靖国参拜で他国からの批判を「もう充分  
もとはとったんだから、日本ばかり責めなく  
てもいいだろう」と一蹴するなど、おや？と  
首をかじげざるをえないところも多い。だが、  
ちよっと周囲を見渡せば、案外この世代の本  
音はこんなところにあるのかと、これまでの  
保守層からの支持ぶりも納得させられる。

結局、彼にとり『生涯現役』であることは、  
党派を超え、声なき声の主（大衆）に寄り添  
い続けることなのかもしれない。四十八の項  
目を読み通したとき、終章にある「人間は自  
然（他者や自己も含む）に動きかけていると  
きのみ価値をつくり、有機的な生きた自然と  
して存在できる」というマルクスの理念が浮  
かび上がってくるのも、その姿勢と通底する。  
「老いて反省することが増えた」という著  
者がこれからどう歩くのかますます楽しみ  
な、同世代異世代ともにオススメの教則本  
だ。

評・宮本誠一（NPO夢屋フナネット代表）

◇よしもと・たかあき 1924年東京生まれ。詩人・思想家。  
東京工業大卒。